

## 質疑応答

### 司会

お二人の先生、ご講演どうもありがとうございます。お二人のお話を引き続き、質疑応答に入りたいと思います。お二人のお話をお聞きになり、ご質問・ご意見等何かございましたらお願いいたします。

### 質問者

旧制旅順高等学校の寮歌に「北帰行」という歌があります。この歌の第三小節目に建大が出てきますね。「北帰行」は宇田博さんが作曲・作詞をされた。私は、宇田さんと「北帰行」のことについて書かれた豊川市医師会の『豊川医報』のコピーを、先ほど桑原先生にさしあげました。

宮沢先生にも後でさしあげます。ここに、この作詞者は異端の学生といいますが、校則に従わなくて建大を放校されたとあります。「北帰行」の作詞は旧制旅順高校から放校処分を受けて退学して国へ帰る時にその心境を歌ったものだそうですが、建大にも在校して建大からも放校されたというんです。小学校、中学校、高校、大学と七回放校（転校もあるでしょうけれども）されたという異端の学生だったということですが、「北帰行」についてはどう思われますか。

### 桑原

私が入学したときは、宇田さんはすでに建大を見限って退学されていました。この会場で建大時代同期生だった方

も居られるようですから、私がお答えするのは差し控えます。

### 宮沢

宇田博さんは建大二期生にあたられまして、私は同期生の方から宇田さんについてお話をしたことがありますが。また数年前に、旧制高校の寮歌を歌っている「白線クラブ」という団体で大陸の高等教育機関についてお話する機会があり、その時に旅順高校の同窓生の方々にもお話をうかがいました。この方のお父様は宇田一博士といって奉天農業大学の学長もなされた偉い農学者で、息子の博さんは奉天一中始まって以来の秀才だった（それほどでもなかったという説もある）そうです。宇田博士は建大の教授も兼任されていて、また建大は大変優秀な学生が行くところだという評判でしたので、宇田さんは優等生として当然建大に進学されたわけです。しかし入学してみたら期待と全く違う大学だったので、放校ではなく自らお辞めになったようです。そして、どうやったのかはわかりませんが、おそらくお父様の伝手があつて、同じ年に旧制一高に転入のような形で入学されたようです。「北帰行」では「建大・一高・旅高」の順番で出てきますが、この一高はこの時の入学を指しているわけです。ところが一高もどうも合わないで、放校かどうか知りませんが、とにかくお辞めになった。そして翌年受験して入学されたのが旅順高校だったそうです。それでここから先はあまり大きな声では言えないんですが、女の子と映画を見に行つて、煙草を吸つて、お酒を飲んでいたことが学校側に知れて、放校になったと聞

いております。ですから「北帰行」は、たぶんこの時旅順高校をおやめになって奉天のお家にお帰りになる頃に、つまり「北へ帰る」時に作られた詞ではないかと思います。

## 司 会

ありがとうございます。

## 桑 原

ちよつとよろしいですか。今の続きですから。実は私もその「白線クラブ」に呼ばれ、私がそのとき先輩宇田さんの話にふれましたところ、そのクラブの幹事の中にお一人旅順高校出身の方がおられて、宇田さんは自分の学校の先輩であると主張されて、先輩のとりあいになりました。

歌は有名になりましたけれども、宇田さんご自身は一高から東大に進まれ、東京放送に入社されましたが、常務か専務に進まれてお辞めになったそうです。仲間うちの評判では非常に秀才だったと言う人も居りますが、人柄はよくないという人の方が多いようです。その後もいろいろな人の話を聞きますと、人間的には評価しないという声が強いです。

## 司 会

ありがとうございます。では次の方、どうぞ。

## 質問者

私は愛知大学が一番最初に募集があつた時に応募しました、創設の時の学生です。実は私たちのクラスは、全部集

まったのは学年一二〇人で、予科三学年ですから全部で三六〇人でした。六割が東亜同文書院大学から来た学生でした。残りのうち一割ぐらい満洲から来た学生がおり、私のクラスには平松輝治ともう一人、杉原晶という男がおりました。そのほか上の学年にも何人かいたと思います。下の学年には満洲師道大学とか新京法政大学出身者が居りましたし、ハルビン学院大学から来た学生もたくさんおりました。非常にこれらのように学生は雑多でございますが、実を言いますと大阪落城の時の落ち武者の集団のようなもので、酒ばかり飲んでちつとも勉強しない学生が多かったです。しかし、この愛知大学には確かに建国大学の血が流れておりますから、どうぞこの学校も姉妹校だと思って大事にしてください。ここにいます皆さまにもお願いいたします。

## 司 会

ありがとうございます。その他にご意見、ご質問等ございますか。

## 質問者

先ほどからいろいろいいお話を聞かせていただきました。ちよつとお聞きしたかったのは、農業実習や軍事教練なんかもあつたようですが、農業の実習が行なわれていたというところで、日本の国内では安岡正泰先生が農士学校というのを作つて、これは農村の長男を集めてやるということ、私の今住んでいる埼玉県のスグ近くにあるんですが、そこで農士学校というのをやっておられました。農士学校でも実習をやっておられたので、安岡先生の影響という

のが建大のほうに伝わっていたのかいなかったのかをお聞きしたいのと、もう一点は先ほど中山優先生のお話が出ましたが、中山優先生というのは私の父親の一期先輩で、喧嘩仲間のようなことで非常に親しく家族ぐるみで付き合っていたので、あの先生がどの程度にお付き合いになつたのか。中山優先生の本をちよつと読んでみたんですが、建大の内容は全然知らないというようなことを言つておられますので、果たして教授なり何なりという肩書きをもらつてやつておられたのか、あるいはただ石原莞爾將軍との関係だけで名前が出てきたのか、そこらあたりがもしお分かりでしたら教えていただきたいと思ひます。

## 宮 沢

農業訓練につきましては、安岡正篤氏との関連は確認していませんが、建大の農業訓練の責任者であつた藤田松二氏は加藤莞治の高弟でした。宮城農學寮にいた時に石原莞爾と知りあい、建大に呼ばれたと聞いています。藤田氏は京都帝大農學部の出身で、そこから後輩が何人か建大に教員として赴任しています。藤田氏は敗戦直後に長春で死亡しまして、死亡原因には諸説ありますが、そのために彼の思想的なことの詳細は分かつていません。ですから安岡正篤氏との思想的な繋がりについてはお答えできません。中山優氏につきましては、建大には教授として赴任していました。本日は話を端折りましたが、初期の建大には、外国人の教授を揃えるという政策によつて招聘した三人の外国人教授がおりました。その内二人は中国人で、朝鮮からは三・一独立運動の時に独立宣言文起草した崔南善教授が

来ています。彼らは「政策教授」と呼ばれましたが、中山優教授がいるなら建大に行つてもいいといつて、親しく付きあつていたようです。その後、陸軍中將の牛島貞夫氏が、東京に人材を集めるために中山氏を呼び寄せようとしたが、石原莞爾は満洲国と日本を自由に行き来して仕事をすればいいと提案して、中山教授を建大に残しました。そのため教授の身分はそのまま、実際には時々建大に行つて講話をする程度であつたようです。石原莞爾將軍の日記が原書房から刊行されていますが、その中に一九三九年四月九日付で中山氏の訪問が記され「政策教授の行方について聞く」とあります。ですから中山氏は石原莞爾將軍と建大の間を時々行き来して、建大に関する情報を伝えていたと、私は考えております。

## 司 会

ありがとうございます。それではもう一方だけ、最後のまとめとしてちよつと短めのご質問があれば。

## 質問者

桑原先生にお伺いします。私は石原將軍の作られました東亜連盟の後継団体である石原莞爾平和思想研究会の会員でもあります。建大神廟を作ったことに関して石原將軍は非常によくないことだと言つていたのは、私も直接聞いた人の証言で聞いています。建大神廟を作ることに関しては実は皇帝の溥儀のほうが提案されたのではないかと私は考えています。実際昭和一〇年と一五年に日本に来ておりますけれども、貞明皇太后なんかに母親のような愛情を感じ、

日本の皇室に非常に親しみを感じていたという事実がござ  
いますし、そういうことでああいうものを作ろうという発  
想は溥儀のほうが先だったのではないでしょうか。先生ど  
うでしょうか。

## 桑原

建国神廟の場合は、建大の先生方を代表してお一人、祭  
神を決める選考会議に出席されたようです。しかし、それ  
らの経緯や結果は学生たちに対して何も知らされませんで  
した。

ただ、これを聞いた石原莞爾將軍は、これは俺が考えた  
満洲国とは違う、こんな国を俺は考えたことはない、と強  
く行く末を案じたようです。

石原將軍は関東軍から左遷されて日本に帰る直前に、初  
めて建大にお見えになり、こんなはずではなかった、俺が  
考えた大学と全く違うと言いつつ、大学を去られたそう  
です。これは私が入学する直前のことです。石原さんはあ  
んなに先見性にみちた意見を持っておられたのに、実際の  
大学運営に口を出さなかったようです。

## 司会

ありがとうございます。最後は建国神廟のお話でした。  
まだいろいろとご質問、あるいはご意見等お持ちと思いま  
すが、時間の関係上これでいったん終わらせていただきま  
して、次は懇親会のほうに場所を移しまして、そちらのほ  
うで続きをお願いしたいと思います。ありがとうございます。

今日はお二人の先生、どうもありがとうございました。



